

村田修子



木の葉が落ちることを余り意識していなかった常緑樹の葉が、新しい芽生えと共に古い葉が交代してはらばらと道に散り敷くのに加えて、秋は落葉樹の葉がまじって、家の前の細い道は木の葉でいっぱいになります。道をはさんだ前の家の塀から道いっぱいには繁り出ている桜、いちょうなどです。から、ほうきではくとき手ごたえのあるくらい分量です。

最初は、東京のまん中でたかぼうきを持ってはき掃除をする。ことを、「なんて風情のあることか」と思っていました。そしてずっと以前に田舎の親戚のお祭りに行ったとき、人手不足を感じて、道から入り込んでいる母屋までの道に、箒目をつけてはいて手伝ってあげて大変感謝され、「都会の人のすることはてぎわがいいなあ」と思いもしなかったことをいわれたのを思い出したり、ときには「茶いらい葉っぱがさ

がさするけれど、ころころころがる いいきもち」などと、渡辺茂先生に作曲して頂いた歌を口ずさみながら、朝の仕事にしています。

それは前隣の御夫妻が植物を大事にされたり、早朝から自分の家の前はもちろん、私のところの前まで環境整備をして下さるので、ほっておけないことから私もするようになって、きれいにしておかないことと同時に、その動機づけをして下さったことに対して大変感謝しているのです。

このように、新しいことをするにも、今までの惰性からぬけ出すにしても、何でも「きっかけ」が大切であることは、幼児の教育の場では特にいろいろな経験をすることです。

例えば、遊びに入れない子ども、友だちが仲々できないとき、たまたま隣にきた友だちと手をつなぐことになり、おす

おずとつないでふと見ると、自分と同じハンカチをつけていたり、同じ模様の運動靴をはいていることを発見して親しみを持つようになって結びつきができる、というように、物がそのきっかけを作ってくれることもあります。また低鉄棒で前まわりができなかったことが、一寸した補助をきっかけに一人でできるようになったことで自信を持ち、鉄棒での活動はもちろん、他の運動具に対しても、また生活全体に自信を持って積極的になる、ということとは多くの教師が経験することです。

私の朝の道掃除は、ときには出掛ける時間が迫っていて心せくときもありますし、できないときもあります。そういうときは、門をあけたとき、隣の手入れされた部分と見比べて「しまった」と後味の悪い思いをするのです。

最近家の手入れをするために四か月位門がとり払われていました。家が道から引込んでいますので、新聞を取りに出で行きますと、すぐ道がひろがっています。木の葉や、心なく捨てた紙屑などのごれた状態がすぐ目にとび込んできます。そうすると、新聞をとるよりも先ず道を、家の前をきれいにしたくなってその仕事に取り掛かるのです。それが余り覚

悟をせずに、気張らずにできるのです。門や扉があったときは、やろうとする気持ちがあんまりとなく違うことに気がつきました。

現在はまた門や扉ができて、それをあけなければ外の道は見えなくなりました。すると矢張り朝の道はきは、やろうと努力して門の外へ出なければならぬ感じになりました。すく手がとどき、目の前にちゃんがある、ということがこんなにも心を開かせてくれるのかしら、と思うと同時に、保育室の中で、もくもくとあき箱を重ねてはりつけたたりしているK君などの姿を思い出しました。

ときには「そんなに長くしなくてもいいのよ」と文句をいいたくなるように、セロファンテープのカッターを自分で持ってきて、はりつけたり穴をあけたりして工夫している姿、やろうと思ひ、その気になったときにはすぐ手近にあること、分かっていたことと思っていました、改めて「これだ」と思いました。と同時に、物だけでなく、私のものの言い方、いいかけ方、なにげなくしていることが、カベになっていることはないかしら、と思っている昨今です。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)